

『上海』と『佳人之奇遇』

— 政治小説の系譜 —

平岡敏夫

1

二〇一一年度日本近代文学会春季大会（5・28～29、日本大学文学部）の二日目に、「上海表象文化研究の試み——戦間期の上海を中心に——」と題するパネル発表があった。石田仁志・田口律男・中沢弥・司会松村良、デイスカッサント土屋忍・劉健輝という陣容だが、横光利一『上海』（昭7、改造社、昭10、書物展望社）の電子テキスト化、校本作成・注釈作業など三年間の研究にもとづくものという。

石田仁志「横光利一『上海』のインターテクスチュアリティ表象の論理」、田口律男「戦間期における上海表象の諸相——横光利一『上海』を軸に——」、中沢弥「横光利一『上海』と映画表象」の発表があって、劉健輝氏の戦間期すなわち転換期の上海に関するコメント、上海バンドのさまがわり、金融資本、中国共産党の創立、男装女子の出現にまで及ぶ、『魔都上海』（2000、講談社）の著者にふさわしい周到な指摘があり、土屋忍氏も五・三〇事件、反日・反英の上海クーデター、ロシア革命、『上海』登場のロシア女性オルガ、あるいはシンガポールにまで及ぶ重要な指摘を行ったが、横光『上海』の典拠としての上海日本商業会議所編『邦人紡績罷業事件と五卅事件及各地の動揺』、満鉄調査資料「上海事件に関する報告」等との比較

言及をはじめとして、新たな成果をあげていることに感銘した。この小論では、右の発表の詳細な紹介はできず、今後の刊行にまつとして、当日私が発言したことに関わる報告にとどめるしかない。

2

上海に行ったのは5回で、ツーリストとしてというよりも、主として上海外国語学院、のち上海外国大学での日本近代文学の集中講義・講演であった。昭和五十七年（一九八二）当時は、黄浦江の東岸浦東は何もなく、21世紀に入ってから5回目の上海の姿容はおどろくべきものだったが、浦東から上海バンドを展望しているうちに、前田愛〔SHANGHAI1925——都市小説としての『上海』〕（昭56・8「文学」）「都市空間のなかの文学」所収）が成りたたぬことに気づいた。「国文学解釈と鑑賞」の横光利一特集（昭58・10）の「上海」論に書いたのでくわしくはそれを参照していただきたいが、本文冒頭の一節は引用しておきたい。

満潮になると河は膨れて逆流した。火を消して蟬集してゐるモーターボートの首の波。蛇の並列。抛り出された揚げ荷の山。鎖で縛られた棧橋の黒い足。測候所のシグナルが平和な風景を示して塔の上へ昇つていった。海関の尖塔が夜霧の中で煙り出した。

突堤に積み上げられた樽の上で、苦力達^{クーリ}が湿つて来た。鈍重な波のまにまに、破れた黒い帆が、傾いてぎしぎしと動き出した。

白皙明敏な、中古代の勇士のやうな顔をしている参木^{まき}は、街を廻つてバンドまで帰つて来た。波打際のベンチには、ロシア人の疲れた春婦達^{はるめ}が並んでゐた。(以下略『定本横光利一全集』)

右の本文は昭和七年の改造社版で、昭和十年書物展望社版では第二文の「火を消して……」以下、「……黒い足。」までが削除されている云々と小文では記しているが、いずれにせよ、黄浦江のほとり、旧上海バンドの景観からこの長篇ははじまつてゐる。右の冒頭文に「測候所のシグナルが」云々とあるが、これは測候所ではなく、信号所である。五・三〇事件の前年に第十版が上海で出た島津長次郎の『上海案内』の挿入写真にも、添付地図にG(S)IGNAL STATIONともある信号所の信号塔である。実際にたしかめてみたのだが、信号所の問題だけでなく、『上海』冒頭の景観には、黄浦江中流、もしくは浦東から眺めたような、上海バンドのスカイラインを眺望する統一の視点がないうことに気づく。語り手は一定の位置から河を眺め、モーターボート・揚荷の山・棧橋、「測候所」のシグナル・海関の尖塔を眺めたというよりも、それらを合成したのであり、固有名詞・地名・地理等に忠実・正確であろうとするような意味での都市空間の意識はないと見るべきだろうと私は書いている。

前田愛氏は「現在でもこの巨大な海港に向けて揚子江から黄浦江をさかのぼる船上の客は、やがて両岸に櫛比する碼頭のあわいに、ほぼ一九二〇年代そのままのスカイラインを望見することになるだろう。黄色く濁った水面の彼方に浮きあがって見える大厦の連なりは、ほとんど幻想的と呼んでもいい位に心魅かれる眺めだ。」と書

いている。まさにそのとおりなのだが、横光の『上海』はこうした景観とはまったく無縁である。前田氏が感嘆してみせる「ほとんど幻想的と呼んでもいい位に心魅かれる眺め」に眩惑されて長篇『上海』を都市空間の文学の実例としていつしか読まされてしまうようなことには私は私としては遠慮したいと前掲小論で記している。この『上海』冒頭の読みに関しては、篠田浩一郎『海に生くる人々』と『上海』(小説はいかに書かれたか)昭57・5、岩波新書)をも参照しつつ前田論文に言及しているのだが、前田氏は「横光の描写が上海の実景、それも典型的な都市空間の位相を的確に把握しながら、最終的にはじつさいの地名を抹消してしまった」と言う。前田氏は横光の『上海』のあちこちをピックアップしつつ、上海の当時の地理を復元しているような傾きがあり、地名の抹消という都市空間論にとつての重大な欠陥を、「祖国との絆を失ってしまった人びとが吹きよせられてくる植民地都市のありようは、地名が消されているという魚の表現から逆に鮮やかに浮かびあがってくる。」と切り抜けているのはいかにも苦しい。地名を正確に書き込み、地理を具体的におさえることによって、上海という植民地都市、そこに棲む人たちが鮮やかに浮かびあがってくるとも言えるからだ。

今回の学会での『上海』に代表される表象文化のパネル発表は、『上海』論の研究史としては前田論文をあげても他の研究に及んでいないようだが、やはり『上海』という長篇の読みが第一であり、都市文化表象を研究しても、作品の読みに帰つてこないとしたら、文学作品を文化論の材料に用いていることにはならないか。私は前掲小論で、横光『上海』は都市小説というよりも、むしろ政治小説としてとらえるべきだとして、文学史における政治小説の系譜に置こう

としたのである。

3

今回、私はデイスカッサントの土屋忍氏のシンガポール云々に刺激されてか、フィラデルフィアの名をあげて発言した。あらためて気づいたことだが、上海という都市が揚子江とその支流黄浦江のほとりにあり、フィラデルフィアという都市はデラウェア川、スクリル川のほとりでアメリカ独立宣言が一七七六年に公布されたところ、一方一九二二年に中国共産党が創立された都市が上海である。

注目すべきはむろん上海が横光の『上海』を産み、フィラデルフィアが東海散士『佳人之奇遇』（明治19）を産んだということである。フィラデルフィアにも私は4回ほど訪れているが、ここのインディペンントホール（独立閣）で、散士と幽蘭・紅連というスペイン、アイルランドの佳人の奇遇があったこと、現在は自由の鐘が吊されている（実物は地上のパビリオンの中）塔へは危険なため昇ることが許されないが、階段は急で狭く、散士と幽蘭・紅連が袖のすり合うほどの近接距離にいたなどと思い、なまなましい感触を覚えたりした（拙稿の「独立閣と自由の鐘—シンボルとしての階段・『羅生門』にふれつつ—」参照。『上海』論と共に『昭和文学史の残像』：90・1、有精堂所収）。

横光『上海』を政治小説と呼んだのは井上謙「横光利一—その創造の生涯—」（由良哲次編『横光利一の文学と生涯』昭52・12、桜楓社）で、「中国の五・三〇（一九二五）事件を扱った政治小説で、時代を風靡していたプロレタリア文学への対抗意識による実験作」とある。井上氏の主著『評伝横光利一』昭50・10、同）には（政治小説）の呼

称は見当らないほど一般には通用していないようだが、あえて歴史的な政治小説という呼称を用いることにより、日本の近代における〈政治〉と〈文学〉の問題、〈西洋〉と〈日本〉ないし〈東洋〉という問題のなかに『上海』を位置づけることができるし、作品の性格や作品世界もまたそれにふさわしいものであるように思われると私は書いている。大正十三年夏、五・三〇事件の前年に神戸高商の選抜生尾山正一の『上海に於ける邦人紡績業』、東京商業会議所代表森盛一郎『上海に於ける動乱直後の印象』（大14・9）といった資料も参照しつつ、横光『上海』に言及してみたのだが、参木と芳秋蘭という佳人との奇遇も描かれており、秋蘭を幽蘭の系譜とみることもできる。政治小説においては志士と佳人の奇遇があり、政治と恋愛は一致している。共産堂員の秋蘭は、中国革命の志士の相手にふさわしいが、横光は「白皙明敏な、中国古代の勇士のやうな顔」を参木に与えた。参木はニヒリストの相貌を示すかにみえて実はナショナリストなのだが、「自分は日本を愛さねばならぬ。だが、それはいつたい、どうすれば良いのであらう。しかし、——先づ、何者よりも東洋の支配者を——と参木は思つた。」とある。この〈国家と個人〉をめぐる心情はほとんど横光のものだろうが、参木はもはや志士たりえない。長篇『上海』には、日本帝国主義の上海支配（中国）支配を明確に「描くこと自体の困難の他に、発表するそのことが困難である」（序）ような実態があった。

『佳人之奇遇』に明の亡命者范卿がいたが、『上海』では中国の志士李英朴、銭石山、ダンサー宮子、亡命ロシア貴族の春婦オルガ等もいる。芥川龍之介「上海游記」から横光に及び、政治小説の系譜として『上海』をとらえようとした小論再論の日はいつの日か。